調査要項

遺 跡 名　入の沢遺跡（いりのさわいせき）
所 在 地　栗原市築館字城生野入の沢、峯岸
調査原因　一般国道 4 号線築館バイパス建設工事に伴う本発掘調査
調査主体　宮城県教育委員会（教育長　髙橋　仁）
調査担当　宮城県教育庁文化財保護課
調査協力　国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所、栗原市教育委員会、
加美町教育委員会、涌谷町教育委員会、多賀城跡調査研究所、
東北歴史博物館、ジオマテック株式会社
調査期間　平成 26 年 4 月 21 日～ 12 月末
調査面積　約 6,000 ㎡

はじめに

入の沢遺跡の発掘調査は、一般国道 4 号線築館バイパス建設工事に先立ち、宮城県教育委員会により平成 26 年 4 月 21 日から行われています。一般国道 4 号線築館バイパス建設事業は、栗原市市街地の交通混雑及び沿道環境の緩和と沿線地域の活性化等を目的として進められています。宮城県教育委員会は、国土交通省と調整を図りながら同事業に係る遺跡調査を進めており、これまでに原田遺跡、下萩沢遺跡、大天馬遺跡、御駒堂遺跡などの調査を実施しています。

第 1 図　入の沢遺跡と周辺の遺跡

入の沢遺跡について

入の沢遺跡は、見晴らしの良い標高 49mの丘陵上に位置します。工事の計画に伴う分布調査により新たに発見された遺跡です。遺跡の範囲は、南北 450 m、東西 460mです。縄文時代、古墳時代前期、奈良・平安時代、鎌倉～江戸時代の遺跡で、古墳時代が中心です。入の沢遺跡の周辺には、史跡伊治城跡、大仏古墳群があります（第 1 図）。

出土遺物

銅鏡、鉄製品、装身具、土師器、砥石、炭化米が出土しました。

銅鏡は 3 枚出土しました。1 枚は半円状の弧形を内に向かうように連ねた文様を特徴とする「内行花文鏡」、残りの 2 枚は半球状の小円を密に並べた文様を特徴とする「珠文鏡」です。「内行花文鏡」は全体の半分が出土し、破損した面が磨かれていることからこの状態で使用されていたと考えられます。「内行花文鏡」は竪穴住居跡 2、「珠文鏡」は竪穴住居跡 1・5 から出土しました。

鉄製品には鏃、斧、鉈があります。鏃は武器、斧と鉈は工具です。竪穴住居跡 1・2・3 から出土しました。

装身具には、管玉、勾玉、ガラス玉などがあります。首飾りなどとして使われていたと考えられます。竪穴住居跡 1 から出土しました。

生活用具である土師器が多く出土しました。様々な器形があり、残りがよく全体の形を復元できるものが多いです。

竪穴住居跡 5 出土　珠文鏡（径 8.2cm）

竪穴住居跡 1 出土　珠文鏡（径 5.6cm）

まとめ

入の沢遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居跡が多数見つかり、遺跡がこの時期を中心とした集落であることがわかりました。現時点では古墳時代前期の最北の大規模な集落と言えます。この集落は、周囲を見渡せるような高い丘陵上に位置し、その周囲を塀と大溝で囲んでおり、一般的な集落よりも高い防御性を備えていたと考えられます。

竪穴住居跡からは、多量の遺物が出土しました。特に、銅鏡、鉄製品、装身具は、通常古墳に副葬されるもので、集落でこれらがまとまって出土することは非常に珍しいです。さらに、遺構に伴う銅鏡の出土は宮城県内では初めてで、国内での最北の出土例です。また、鉄製品の出土も古墳時代前期では最北の出土例です。

遺構、遺物の成果から、入の沢遺跡はこの地域を治めた有力な集団によって営まれた拠点的な集落であったと考えられます。

【関連年表】

時代		年代	できごと	
旧石器時代		約40,000年前	日本列島各地で人類が生活するようになる	
縄文時代		16,000年前	土器・弓矢が使用されるようになる	入の沢遺跡
弥生時代		約2,500年前	水田稲作が始まる	
古墳時代	前期	西暦300年～	畿内で前方後円墳が造られる。宮城県では遠見塚古墳、雷神山古墳が造られる	入の沢遺跡
	中期	400年～	大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）が造られる	
	後期	500年～	聖徳太子が政治をおこなう	
飛鳥時代		645年	乙巳の変（大化の改新）	
奈良時代		710年	平城京（奈良県）に遷都	
平安時代		794年	平安京（京都府）に遷都	
鎌倉時代		1192年	源頼朝が征夷大将軍になる	入の沢遺跡
室町時代		1338年	足利尊氏が室町幕府を開く	
江戸時代		1603年	徳川家康が江戸幕府を開く	

発見された遺構

今回調査を行っているのは遺跡の南側です。面積が広いことから、地形により調査区をＡ区とＢ区に分けています（第２図）。

竪穴住居跡、塀跡、大溝跡、塚が見つかりました（第３図）。竪穴住居跡は 49 軒あり、今回調査したのは 17 軒です。このうち、古墳時代前期は 12 軒、奈良・平安時代は５軒です。未調査の竪穴住居跡も、多くは古墳時代前期とみています。塚は２基あり、どちらも鎌倉～江戸時代のものです。今回は、古墳時代前期の成果についてまとめます。

古墳時代前期

竪穴住居跡、塀跡、大溝跡です。塀跡と大溝跡は並行していて、竪穴住居跡からなる集落域を囲んでいます。また、Ｂ区の北西部には凸形の張り出しが造られています。

竪穴住居跡は地面を掘り下げて床と壁をつくった建物です。一辺４～8mの正方形あるいは長方形で、一辺５～6mの規模のものが多いです。火事にあったものが確認でき、そこから炭になった柱や屋根の材などが見つかりました。

塀跡は材木を 20 ～ 30cm 間隔で並べた材木塀です。

大溝跡は岩盤を掘って造られています。幅は２～4m、深さは 0.5 ～ 1.5mほどです。全体で 380m ほどの長さになるとみられます。

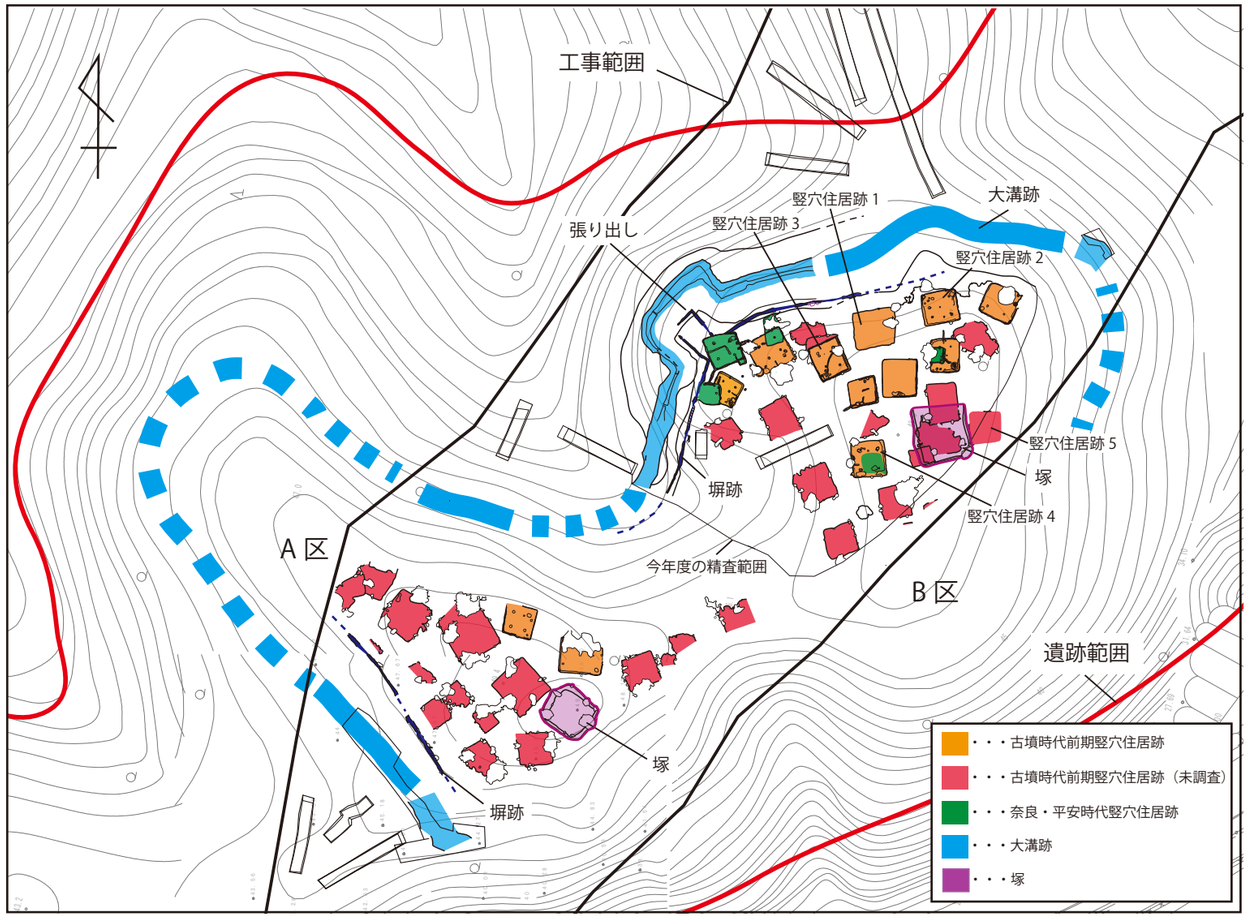
竪穴住居跡がある丘陵頂部と大溝跡の底面との高低差は、最大で約 4m あります。大溝跡の外側には掘った土を利用した盛土が行われていました。

集落域と大溝（北東から）

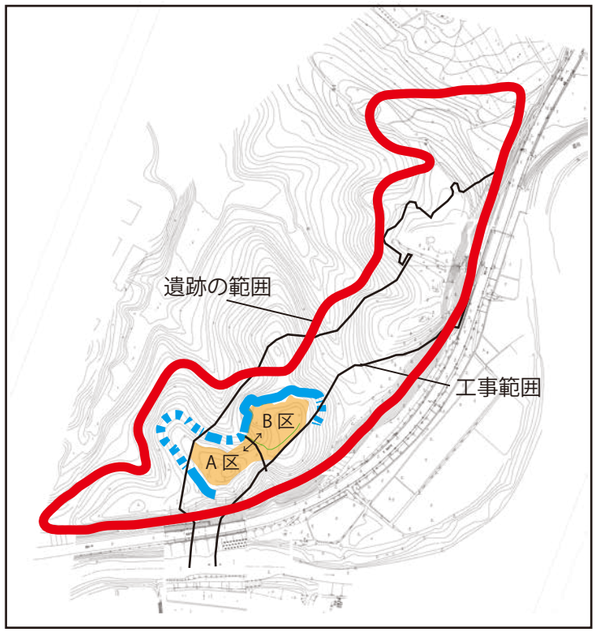
塀跡と大溝跡の位置に人が立っています。

張り出しのようす（南東から）

凸形に造り出され、塀跡、大溝跡もそれに沿っています。



第３図　入の沢遺跡南側の遺構配置図 (S=1/1,000)



第２図　Ａ区、Ｂ区の位置（S=1/6,000）

竪穴住居跡１の炭化材、土器の出土状況（西から）

竪穴住居跡１は、火事にあった住居です。そのため持ち出されなかった道具が多く出土しました。また、燃えて炭になった柱や屋根の木材も多く残っていました。

竪穴住居跡１の土器の出土状況（北西から）

当時使われていた土器が倒れた状態で出土しました。形の異なる土器が組み合わされて使われていたことが分かります。

竪穴住居跡１　銅鏡出土状況（北東から）

竪穴住居跡１　鉄斧出土状況（北から）

竪穴住居跡１　管玉出土状況（北東から）